武田泰淳全集

第十二巻

武田泰淳全集

第十三巻

筑摩書房

武田泰淳全集 第十三巻
昭和四十七年三月二十五日 第一刷発行

著者 武田泰淳
発行者 竹之内静雄
発行所 株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話 東京(二九二)七六五一(代表)
振替 東京 四一二三
郵便番号 一〇一—九一

印刷 株式会社 三松堂
製本 和田製本工業株式会社

(分類) 0395 (製品) 72413 (出版社) 4604

第十三巻　目　次

政治家の文章……3
今年の文学抱負……105
しろうと批評とは何か……106
江口渙著『三つの死』……108
「白色婦人」と黄色男子……109
ヘルマン・ブロッホ著『罪なき人々』……112
日本人の顔……113
仏教と文学……114
反思想家の返事……116
物語の新しい航路……120
戒名と兵隊……125
戦術としての批評……128

微小な存在……134
動物・植物・鉱物……136
古典の再評価……138
メーデー見聞記……141
神話について……146
『火の接吻』あとがき……151
小説家としての武者小路氏……153
愉快な社会主義者・山本健吉……158
高橋義孝氏について……159
『敵の秘密』あとがき……163
黒い掌……165
三島由紀夫『小説家の休暇』……166
堀田善衛……167
悪徳について……169

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

楽しきかな食堂……181
大文学と取組め……182
サルトル著『ユダヤ人』……183
X氏との対話……184
女神と泥人間……194
読まれるということ……196
「快楽論争」について……197
品行方正な背徳……203
癩者の生活から生れた四書……209
埴谷雄高論……211
私と共産主義……216
吉川英治論……221
あの頃この頃……229
寺田透著『同時代の文学者』……230

ものやわらかな人……234
梅棹忠夫著『モゴール族探検記』……236
小説の怪物性……237
カミュ著『転落』……242
証言はすべての人間に重要……243
ぼくと上海……244
兎の耳と鼠の歯……246
『みる・きく・かんがえる』はしがき……248
東海村見物記……249
生き残りの感慨……260
あさって会……264
好色一代男……265
魔術師になるな……268
駒田信二著『石の夜』……270

イギリスの知性・人間の野性……271
植物より花屋さんへ……273
堀田善衛著『インドで考えたこと』……275
科学と文学……276
楡の樹蔭の欲望……280
限界状況における人間……282
人間をささえるもの……293
日本の信仰……302
顔見世大歌舞伎……303
芸術座「風雪三十三年の夢」……304
新宿末広亭にて……306
『楢山節考』以上！……307
社会科学者と文学者……308
中村光夫作『人と狼』……311

どこにでも、何回でも……312
私のひとりごと……313
中国歌舞団……317
感　想……318
応挙から学ぶべきもの……319
「助六」の物理作用……323
幸田文学のおもしろさ……324
『現代の魔術』あとがき……327
『士魂商才』あとがき……327
サーカスの演出……330
気はやさしくて力もち……331
何事も、ながい目で……332
思いつめる……333
原子へ還る……334

庶民の泣き笑い……335
国民ぐるみ……337
仙人はどこにいる？……338
おまわりさんよ……339
いまどこにいる？……340
しずかに決心しよう……341
いろいろな大学生……342
ほめる専門の八方美人……343
うつされたがる……344
わかりやすい？……345
道徳的なりや否や……346
歴史と文学……347
庭はどこにでもある……354
あのころの楽しみ……355

日本は進歩しつつある……356
魯迅と中野重治……358
文学者と政治家……359
合同公演「関漢卿」……363
見直そう「北海道」……365
『地下室の女神』あとがき……367
岡本太郎著『黒い太陽』……368
ロブグリエ著『嫉妬』……369
PRあるいはCM的自伝……370
諸行無常のはなし……377
書き歩き一週間……386
堀田善衛著『上海にて』……388
新しき「三人姉妹」の悲哀……390
冒険すべき企画……394

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

竹内好の孤独……394
解説……桶谷秀昭……397
解題……409

評

論

3

政治家の文章

I　「政党政派を超越したる偉人」の文章

「光輝ある三千年の歴史を有する帝国の運命盛衰は繫りて吾一人にある。親愛する七千万同胞の栄辱興亡は預りて吾一身にある。余は此の森厳なる責任感と崇高なる真面目とを以て勇往する。余は進取、積極、放胆、活潑、偉大の精神意気を以て驀進する。世態人情の趨向は余に此の決意を一層鞏固ならしめたり。」

これは陸軍次官、宇垣一成が大正十三年、一月一日、年頭の決意として日記に書きしるした文章である。

おそらく、鷗外も漱石も荷風も龍之介も、このような文章は書けなかったであろう。ぼくらの先輩の文学者には、この種の自信はなかった。むしろ宇垣のここに示した如き自信が持てなかったこと、それが彼らが文学者となった出発点であった。彼らには、このような文章の書けるはずはなかった。どのようなことがあっても書けない、書きたくない、書いてはならぬという自覚と信念があったればこそ、彼らは、全く別種の文章を書きつづけることができたのである。

「日記」は、公開の文書とはちがうのであるから、他人の眼を警戒して体裁をつくろう必要はない。最近発表された、漱石の日記の一部などは、家族に対する冷たい批判が、いらだった神経のするどさをむき出しにして、痛ましいほどである。あれくらい自己を忠実に語っている、無類の自覚者であった漱石にして、なお秘蔵の日記だけにしかぶちまけられない「真実」があった。真実の自己をいちいち、一般国民や仲間の競争者にさらけ出しておくわけにはいかない、政治の上層部に位していた宇垣のことであるから、さだめし公開された彼の言論とは異った調子の告白なり、詠

嘆なりが含まれているであろうと予想されるのに、彼の日記には、あまりその気配が見うけられない。

これは何も、宇垣が「日記」においても嘘をついている結果、そうなったのではない。彼はあくまで天地に恥じざる正直者が、裏も表もなく、堂々たる文章を書きつづっていると、信じてうたがわない結果、こうなったのである。おそらく漱石の眼からすれば、宇垣は、一度も真実の自己を語ったことのない男であろう。しかし宇垣自身に言わせれば、自分は公開の文書においても、ましていわんや秘蔵の手記においては、自己を語って誤りなかったと信じているにちがいない。

「光輝ある三千年の歴史を有する帝国」という、きまり文句を何のこだわりもなく書き記したとき、彼は決して、それが「きまり文句」であるから、あるいはそう書いておきさえすれば安全無事だからと判断して、この言葉をえらんだわけではあるまい。彼の「森厳なる責任感と崇高なる真面目」が、なんの矛盾もなく、「帝国」や「光輝」と結びつくことができるという「偉大の精神意気を以て」、一字一句を書き記したのである。文章なるものが、それを書く者の全身の「栄辱興亡」を決する一つの重大な鍵であることを、ぼくらの先輩文学者とは比較にならぬ、浅い自覚ではあったにせよ、彼は彼なりに、おぼろげながら感じとってはいたのである。国会における陸軍大臣の答弁のちょっとした言いまわし一つで、内閣がつぶれかかる実情には、もっともくわしい権力者の一人なのであるから、かつての在郷軍人会長が出征兵士を送り出すさいの、あの無邪気な無責任さ、瞬間的な興奮のかわりに、かなりぬけ目ない永つづきする計画性なしでいたはずはない。

いな、むしろ宇垣流に言えば、自己の文章の責任を、おぼろげながらにしか感じとっていないのは、文学者の方であったはずである。「世態人情の趣向」を、もっともよく知悉しているのは彼であり、それ故、彼自身こそ、唯一絶対の自覚者であると考えてはばからなかった。

さまざまな象形文字を、粘土や石壁や銅器、鉄器に彫りつけていた原始時代から、文章を書きしるす人間は、すべて自覚者であった。「文学者」だけが、自覚者であったわけではない。その意味では、「日記」を書きしるす陸軍次官（やがては、陸軍大臣、朝鮮総督となる強力者）が、頭のハッキリした自覚者であることはまちがいない。

宇垣流に解釈すれば「光輝ある三千年の歴史を有する帝国」も、漱石風に考察すれば、人間（したがって日本人）のエゴイズムの持続にすぎなかった。

同時代の仲間（ことに政治の上層部）のエゴイズムについて、宇垣は一小説家、一大学教授よりはるかに広範囲に

わたる目撃者であった。政治屋のエゴイズムに対処する戦術において、ひけをとるような弱者ではなかった。彼をひきたて、彼を出世させた先輩、陸相であり政党総裁であり首相であった大将、田中義一のエゴイズムについて、宇垣がどれほど無遠慮な、痛烈な見方をしているか。自己保存のためには、あらゆる術策を行使してはばからない政治家の動きを見ぬく彼の眼光は、精妙なレンズのはたらきに似ている。その彼が、こと「帝国」や「吾一身」のこととなると、彼の人間論の手がかりとなっているはずの、その大切なエゴイズムを一片だに見る能力を失っているのは、どうしたことだろうか。

大正十五年、元旦の所感は、次の如くである。

「――今後の仕事も余は人事の最善を尽して而して後天命を待つ底の覚悟を以て当る考である。従て至尊と神明の庇護、同僚や後輩の支持に待つこと頗る大なりと他力恃頼を排する余としても考へて居る。乍併成敗利鈍毀誉褒貶振うて余一人に負荷するの概を以て進みつつ余としては他力の感響を蒙り、他方に責任の一部分たりとも担はしむることは本意でない。善かれ悪かれ余一人で引受け仕事し行きたき考である。猛虎一声山月高の気合を以て此の寅年は進むべき信念である!!」

軍縮というむずかしい手術に成功し、師団を減らすという憎まれ役をひきうけ、結局は陸軍の装備を近代化した指導者である。冷静な合理主義者とも考えられる宇垣が、どうにも非合理主義者ととられそうな「猛虎一声山月高」の気合を、平気で示しているのはなぜだろうか。もろもろの野の獣や家畜どもをはなれて、孤独の生を生きねばならぬ山上の「猛虎」とは、およそかけはなれた平地の組織者であった。国民を支配することによって、「国民の代表者」になるために、牙や爪を露出したり隠蔽したりして、次第に地位を強固にして行く政治家であった。

中島敦の『山月記』の主人公も、人喰い虎と化した詩人であった。芸術家としての倨傲のため、ついに人間から虎に変身した詩人には、悲痛の心があった。人と生れながら、人を喰わねばならぬ猛虎となった自分を、否定し、噛みころしたいような、悲しみ苦しみがあった。彼が山上に立って、一声、ほえるとき、旅人をおびやかすその声には「おれの真似をしてくれるな。おれの名誉心、競争欲、おれの執念のために、おれは虎になった。しかも、人間の心を失うことができないまま、虎になった。そんなおれが、外面的にはどれほど猛々しく見えようと、どれほどやりきれない苦痛のかたまりであることか」と、訴えずにいられない、自己批判とも自己破壊ともつかない告白がこもっていた。

唐代の詩人と、日本帝国主義の全盛期の政治家では、お

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com